芹霊と
１００人の元カレ
８【完】

【完】芹霊と１００人の元カレ８

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20420484

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, モブ霊(別れています), 嘔吐

芹霊前提、師匠総受けです。モブ霊（別れています）が含まれます。倫理がアレです。今回でおしまいとなります！ここまでお付き合いくださりありがとうございました🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます～！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

【完】芹霊と１００人の元カレ　8

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

芹沢と霊幻が付き合って、３か月が経とうとしていた。
「ああ、そう言えばもうすぐ誕生日じゃねえか。何か欲しいものあるか？」
カレンダーを見ながら霊幻が振り返ると、緊張してこわばった芹沢の顔があって、霊幻の顔から笑顔が消える。
（そっか、俺に飽きちゃったか）
この時が来たな、と霊幻は諦めた苦笑を浮かべた。
「霊幻さん、」
「うん、分かってる」
芹沢は霊幻の手を取って、流石だ、と呟いた。
「俺と結婚して欲しいんです」
「そうだな、別れよう」
きょとんと２人は見つめ合った。
「え？」
「は？」
お互いがお互いに混乱する。
「あの、え？なんでですか」
「え、いや、別れ話じゃねえの？」
「違いますけど。霊幻さんが別れたくなるまででいいんで、俺と家族になって欲しいんです。歩けるだけ、一緒に歩いてくれませんか？」
「は？何？新婚ごっこしたいってこと？」
「できるなら、籍を入れたいです。パートナーシップ使いたい」
すう、と霊幻の顔が青くなる。

「お前、お前そんなに俺のことを……」
霊幻は芹沢を抱きしめ、そして辛そうに顔を歪めた。
「芹沢、俺と別れてくれ」
芹沢の舌が乾いて、喉に張り付いた。
「俺は卑怯者なんだ。お前のことが好きじゃないのに、男に捨てられて寂しくて、エクボに当てつけがしたくて、お前と付き合った。だから……」
「……知ってましたよ。俺はそれでも良かったんです」
霊幻を抱きしめ返した芹沢は微笑む。
「でも霊幻さん、今は俺のこと好きでしょ？貴方惚れっぽいから」
霊幻は顔を真っ赤にしてはくはくと口を開閉した。
「〜〜〜〜っ、好きッ、だからこそ！芹沢は、俺なんかと、結婚して欲しくない！！」
「そういう理由なら、俺は引きません！両想いのあなたの手を離す理由なんて、無い！」
「お前は俺には勿体無い！別れよう！」
「何を今更！別れません！」
わなわなと震えた霊幻は芹沢を突き飛ばし、隠して置いていたボストンバッグを手に、玄関から飛び出した。
「別れた！バイバイだ！」
「あっこら何ですかそれ！別れませんからね！」
芹沢は慌ててスウェットのまま、右足は革靴を、左足はサンダルを履いて飛び出してしまう。
何度も転びそうになりながら、同じようにサンダルとスニーカーを履いている霊幻を捕まえた。
「離してくれッ……！」
「離しません！もう！どうしたんですか、突然！」
ジェラートピケの部屋着のまま飛び出した霊幻を、芹沢は抱きしめる。案の定、２人とも身体が冷たくなり始めていた。
「俺は！どうせ別れると思ってたから！芹沢と付き合ったんだよ！！」
「……そうなんですね」
「お前はいい男だよ……優しくて、頼りになって、一緒にいて楽し

い。幸せになるべき男だ。だから俺と別れてくれ」
「ちょっと意味分かりません」
「……俺がどれだけビッチか知ってるだろう！？」
「嘘つかないでくださいよ。貴方、俺と付き合ってから一度も浮気してないじゃないですか。アレ、元カレが流した噂でしょう」
霊幻に嫌がらせをするために、元カレ連合は色々なことをしている、ということが芹沢には分かってきていた。
本当にタチの悪い連中だ、と芹沢はしみじみ思う。
「貴方は一途で、可愛い人だ」
霊幻は絶句する。
「俺、俺はっ！元カレが、１００人もいるんだぞ！嫌だろ！」
「うーん、正直数が多すぎて、『すごいな』って感想しか無いです」
「……っ１００人の男と寝てきたんだぞ……！？嫌だろうが！！」
「うーん、ええと、俺はそれよりも、」
芹沢はそっと霊幻の目の下に手を当てる。
「１００回霊幻さんが泣いてきたことの方が、嫌です。なんでみんなこんな一途な人を泣かせるんだろう、って思います」
ぽろ、と霊幻が涙をこぼして、芹沢は慌てた。
「お前、お前、嫌じゃないの」
「嫌だったら最初から付き合ってませんよ……」
「馬鹿だな、俺なんか、俺なんか選ばなければ、幸せになれたのに」
「えっこれ以上の幸せなんてあるんですか？無いでしょう」
芹沢は溢れ出てくる涙を必死にぬぐう。
霊幻の嬉し涙を。
「……俺でいいの？」
「霊幻さんじゃないと嫌ですね」
「……怖い」
「えっすみません」
「違う、お前に捨てられる時が怖いんだ。こんなに、こんなに好きにさせて、お前責任取れよ」
「だから結婚しましょうって言ってるじゃないですか。貴方が俺を

振るまで、ずっとそばに居る権利をください」
「馬鹿だな、お前が俺を捨てるまで、ずっとそばに居るからな」
「じゃあずっと一緒じゃないですか。ただの永遠だ」
霊幻が目を細めて幸せそうに笑って、涙の最後の一雫が、流れて消えた。
「ほら」
「えっ？」
「何かあるだろ」
霊幻に左手を差し出されて、芹沢はアワアワと慌てる。
「あの、結婚してください」
「……はい」
芹沢はポケットから取り出した指輪を取り出して、震える手で霊幻の左手の薬指にはめる。
「……ブカブカじゃねえか」
「あっしまった！俺の指に合わせて注文したから……！」
「じゃあ丁度いいじゃん。これはお前の、ってことで。俺、前から欲しかった指輪あんだよな〜」
芹沢の左手の薬指に指輪をはめながら、に、と食えない笑みを霊幻は浮かべる。
「俺、本当は欲しがりだからな？覚悟しろよ、芹沢」
「嬉しいです。いっぱい欲しがってください。これからは霊幻さんにいっぱいプレゼントしていいんですね」
にへ、とだらしなく顔を綻ばせる芹沢に霊幻はむっとする。
「……まず指輪！カルティエのコレが欲しい。バレリーナな。足りなかったら俺も出すから……」
「え、こんな安いのでいいんですか？俺が今つけてるやつティファニーの１００万のやつですよ」
「はぁ！？！？」
「まあ婚約指輪はソレでいいとして、結婚指輪の方をふんぱつしますか？」
「ちょっちょっちょっ、待て！指輪は一個でいい！これから２人で暮らすんだろが、金は節約しないと！」
「なら、もうちょっと高いのにしましょうよ」

「いやいやいやいい！これでいい！普段使いできないだろが！」
「ふふっ……」
「なんだよ」
「結局あんまり貢がせてくれないんですから……ホントに、アンタ、悪女になり切れない人だなぁ」
霊幻はまたぱくぱくと口を動かす。
「うるっ！さいっ！結婚式はハワイだからな！」
「いいですね。元カレが乗り込んで来られないところだ」
「ご両親にも！紹介しろよ！」
「じゃあ今から行きましょう！」
ふわ、と霊幻の身体が超能力で軽くなる。
「飛ばしますよ！」
「え、なんで、今から！？！？」
「嫌なことはすぐしろ、ってヨシフさんが言ってました！」
「……なんだよ、最近、ヨシフ、ヨシフって……」
少し唇を尖らせる霊幻を、芹沢は抱きしめて踊り出したくなる。
「すごい！毎秒可愛いを更新してくる！」
「はあ！？」
「ほら、つきましたよ！」
まだ明かりがついている芹沢の実家に、霊幻の身体に緊張が走る。
「あの、やっぱり、こんな格好だし……」
「ただいまー」

がらっ。

「お前！！！！」
「あらお帰んなさい。ええと……？」
ぱたぱたと芹沢の母が出迎える。
「かあちゃん、俺、この人と結婚するよ」
「あらそう、おめでとう」
「軽っ！」
「で、そちらはどなた……？」
「ええと、なんかすみません、霊幻新隆と申しまして、この度

は……」
「ああ、所長さん」
「そうなんです。本当に申し訳ない……」
「え？克也に何か悪いことしたの？」
「いえその……私は見てのとおり、男ですし……」
「克也も男よ。そんなことで私は霊幻さんのご両親に克也が頭を下げては欲しく無いわね」
「……あの、すみません」
「だから何を謝っていらっしゃるの」
「……俺、元カレが１００人いて……」
「えっすご……えっ？１００人？」
「だからあの、申し訳なくて……」
「いやあの人数が多すぎて、その申し訳なさがもう良く分からないわ。克也あんたよくこの人射止められたわね？」
「へへ……」
「正直、元カレが1人居ましたって言われる方が嫌かも」
「そ、そういうものですか……？」
小さくなる霊幻に、優しく芹沢の母は微笑みかける。
「なんにせよ、貴方は克也に選ばれたんだから、自信持って」
霊幻は苦笑する。
「すごく御子息を信頼なされているんですね」
「ええ」
す、と克也の母は手で心臓を押さえる。
「私は克也を信じています。……昔から、ずっと」

それは、引きこもっていた時も、ずっと。

ぶわ、と涙が溢れて、芹沢は俯いて隠す。
「かあ゛ちゃんっ゛……」
「芹沢、すみません、すみません、ありがとうございます、すみません……」
泣きじゃくる２人を見ながら、芹沢の母も涙をぬぐって、みかん持っていきなさい、とありったけ箱で持ってきた。

※

「は、ぁ……っ」
たまらない、と言いたげに霊幻が熱い息を漏らす。
２人は、初めて繋がったような気がしていた。
「おくっ……もっと、突いて……あっ、あンっ！」
ただ快感を追い求める霊幻が嬉しくて、芹沢は請われるがままに腰を振る。
「きもちいっ……！まだ、まだイかないで……！」
「大丈夫です。これまでは早くイった方がいいかな、と思って動いてましたけど、今日は好きにさせて貰ってるんで」
びくびくと震えて何度か射精しても、構わず穿って欲しいと霊幻はねだる。案外激しいセックスが好きだったのだ、と芹沢はひっそりと驚いていた。
「あがっ！」
がぽ、と先端が壁を破り肉の輪にハマって、芹沢はギョッとする。
「え、なんか、これ、大丈夫ですか！？！？」
「いい゛っ！もっとっ゛！！」
は、と生理的な涙をボロボロ流しながら、そっと霊幻は腹を押さえる。
「ここまではいったの、せりざわがはじめてだからっ……！」
芹沢は呆然と締め付けを味わう。
「……っ、霊幻さんの初めてなんていらない……！そのかわり、最後をください。俺はあなたの最期が欲しい」
霊幻は熱に浮かされた瞳で、芹沢を見つめて、頷きながら何度も頬を撫でる。
「イ、く……！」
「はい……！」
チカチカと深い絶頂を味わいながら、霊幻は芹沢がナカで弾けたのを、その熱さで知った。

※

「うわー、ペアリング職場でするカップル、無いわーw」
笑いながらエクボが霊幻の薬指をつつく。
「止めろよ。婚約指輪だから、公的な場でするのはむしろ自然だろーが」
鬱陶しそうに霊幻がその手をはらう。
「は」
「ほら、今日の現場の地図。ちゃっちゃと働いてくれ」
呆然とするエクボは、ぎこちない足取りで相談所の出口に向かう。
「あ、ごめん」
心がここに無いエクボに、入ってきた影山茂夫はぶつかってしまった。
「師匠、やっとこのキャラメルサイコロの除霊終わりました。こんなので蠱毒する人どうかしてる……あれ」
霊幻の薬指を見て、茂夫がけたけたと笑う。
「なんですか、これ！馬鹿だなあ、そろそろ別れるのに」
かり、と指輪を外そうとする手から、驚いて霊幻は逃げる。
「あのな、モブ、俺、今の恋人と結婚するんだ」
「冗談でしょう？その人と別れたら、次はまた僕の番なんだから。つまらないことはやめてください……いらいらするんで」
超能力を使ってまで指輪を奪い取ろうとする茂夫に驚いて、霊幻はきゅっと左手を握る。
「モブ、お前、まさか、まだ俺を好きなつもりでいるのか」
「当然でしょう、僕は別れたつもりはないんですから！」
霊幻は真っ青になった唇を震わせた。
「モブ、俺は、一度捨てられた男とは、２度と付き合わない。付き合えないんだ」
「は」
茂夫が笑顔のまま固まる。
「だから、この先、もしこの人と別れても──お前と付き合うことは、２度と、無いよ」
かたかたとマグカップが揺れる。
「そんな──そんなの、聞いてない」

「……言ってないからな。でも今、言ったから」
「僕は！」
ご、と事務所の備品が吹っ飛んだのを、芹沢がこっそりキャッチした。
「いつか！また僕の番が来るんだと信じて！アンタに他の男が触るのを許してたんだ！！」
「……そうだったのか。ごめんな。そんな日は来ない」
余りにも残酷な言葉に、茂夫の唇が白くなっていく。
「モブ、お前には俺よりいい人が居るよ。ほら、別れるキッカケになった彼女はどうしたんだ？元気か？」
「──っ、アンタが付き合えって言ったから！！！！」
茂夫は霊幻の襟首を掴んで引き寄せる。
「アンタが、一度は女の子と付き合えなんて、言ったから……だから僕はあの子とデートしたんだ。ちっとも楽しくなかった。家に帰って、それを伝えようとしたら、アンタは居なくて……いくら待っても帰ってこなくて……み、３日後には、は、花沢くんの、恋人に、なってて……ッ！」
びしゃびしゃ、と茂夫が胃液を吐くのを、静かに霊幻は見つめる。
「モブ、二股なんて失礼なこと、お前は女の子にしたりしないよな？」
「それはッ！」
「だから俺は理解したんだよ。ああ、モブに振られたんだな、って」
困ったように霊幻は笑う。
「ごめんなあ、どれだけ上手いこと言われても、もうお前にセックスさせてやれねえんだよ」
「ちが、違う……僕は、師匠を……！」
「俺にだってちっぽけだけど、プライドってもんがあるからな。俺を捨てた男に──かける情けなんてねえよ」
「あ……あァ……ッ！」
茂夫はふらふらと逃げ出す。
「あっおい、ゲロ掃除してけよ！」
余りにも薄情に、霊幻はそう声をかけた。

「……ちょっと様子見て来ます」
「いえ、僕が行きます。……今カレが行っても火に油を注ぐだけだ」
あんまりな霊幻の対処に立ち上がった芹沢を抑えて、律が立ち上がる。
「僕も行くよ」
花沢も、律に続いて出ていった。
「霊幻さん……アレはねぇよ」
鈴木将が流石にたしなめる。
「俺なんか間違ったこと言ったか？」
「正しければいいってもんじゃ無いぞ」
珍しく霊幻をたしなめる最上啓示に、その通りだと芹沢はこっそり頷いた。

その日の夜。

黒い閃光が、天を貫いた。
咄嗟に飛び起きた芹沢が、霊幻を腕に抱いて全力でバリアを張る。
しばらくすると、調味市全域でけたたましいサイレンが鳴り始めた。

『避難してください　避難してください　巨大な竜巻が調味市全域を飲み込もうとしています　避難してください　避難してください』

（影山くんだ……！）
芹沢は直感的に理解する。こんなことを一瞬で起こせるのは、影山茂夫ぐらいしかいない。
「ッ霊幻さん、急いで避難しましょう！とにかく調味市から出ないと……！」
「分かった」
テキパキと霊幻はスーツを着て荷物を纏める。芹沢の方がもたついたぐらいだった。

「霊幻さん、このネックレスを付けてください。お守りです」
「は？なんだこのごちゃごちゃしたの」
「とにかく、守りがこもってるんで」
芹沢は元カレたちが残したプレゼントを、下げるだけ下げたネックレスを霊幻に身に付けさせる。
「あと、これは一度だけすごい力で攻撃できます。これも念の為」
律から託されたボールペンの飛び出す針を見せながら、霊幻の手に握らせる。
「さ、逃げましょう！」
ティロリロと芹沢のスマホが鳴って、芹沢は慌てて出る。
「……ヨシフさん！」
『分かってると思うが、その大災害は影山茂夫が引き起こしてる』
「やっぱり、影山くんが……」
『止めるためにありったけ超能力者を集めてる。お前も急ぎ中心地に向かってくれ。調味公園だ』
「了解しました」
スマホを切った芹沢は霊幻に向き直る。
「俺は出動します。霊幻さんは急いで避難してください」
「……この嵐を起こしてるのは、モブなんだな？」
覚悟を決めた瞳に芹沢はたじろいだ。
「俺も行く。……いや、俺が行く。たぶん、そうしないとダメなんだ」
「でも！」
「芹沢。本当に超能力者だけで止められるのか？この５年間で、モブ以上の超能力者は見つかったのか？」
「……ッ」
「俺なら。師匠の俺なら、モブを説得できる」
「……、俺から離れないでください！」
「分かった！」
２人は避難用の荷物を置いて、身軽なまま調味公園に向かった。

「あ？霊幻センセ連れて来たのか？」
「すみません、事情があって──」

「いや、丁度いい」
迷わず──小刀で霊幻を刺そうとしたヨシフの手を、芹沢は蹴り上げる。
「なんの、なんの真似ですか！！」
「……こいつは、『忘れガタナ』と言ってな。正倉院に秘蔵されてる国宝だ。この刀に刺されると、存在そのものがこの世から忘れられる」
「……！！」
「影山茂夫は、時間を巻き戻すためにこの次元を捻じ曲げようとしている。……影山茂夫と、霊幻新隆が付き合っていた時間軸に、戻るために。そんなことをすればこの時空が持たない。世界が終わる」
「めちゃくちゃだ……」
「それを阻止するには、霊幻新隆の存在そのものが『無かったこと』になるのが確実だ。……上はそう判断して、この刀を俺に託したんだ。……どいてくれ、芹沢。俺は霊幻を──殺さなくてはならない」
「どきません」
「せっかくの自衛隊への所属を消されたいのか！」
「したければすれば良いじゃないですか！俺は霊幻さんに贅沢させてあげたくて、自衛隊でバイトしてたんです！霊幻さんを失うことになるなら意味がない！……俺は、優先順位を間違えません……！」
は、とヨシフは冷たく笑う。
「やれやれ──超能力ありで、お前とは戦いたく無かったんだがな」
「……っ、霊幻さん、下がって！」
「ちょっといいか」
す、と霊幻が手を上げる。
「……なんだ」
「その刀、ようは呪いがかかってるんだよな？だったら、多分モブには通用しねーぞ」
「何？」
「神度剣を一度うっかり持っちまったことがあるんだが」

「なんでそんな物騒な経験があるんだよ！あんたは何でも不用意に触りすぎだ！」
「俺が剣に乗っ取られて葬儀場を吹っ飛ばそうとしたら、モブが剣の呪い？神通力？的なのをはらっちまったんだよ。たぶん、神度剣がモブに通用しないなら、その忘れガタナも通用しないんじゃねえか？」
「……」
ヨシフは難しい顔をして黙り込んでしまった。
「それより、一度実績がある、俺からの説得を試した方がいいと思うがな」
「……ちょっと待て」
ヨシフがぼそぼそとどこかと電話する。
「……いいだろう。試す価値はある、との政府の判断だ。説得が失敗したら、この世界にあるありとあらゆる武器、攻撃方法を影山茂夫に試すことになる。霊幻、お前を忘れガタナで刺してから、
な。……気張れよ、霊幻、」
じ、とヨシフの凪いだ瞳が芹沢を見つめる。
「……芹沢」
「はいッ！」
芹沢は身が引き締まる気がした。
「すまない、遅くなった。何があって影山茂夫がああなった？」
「親父、律のアニキ……影山茂夫は、元カレ連合最後の、そして最強の四天王だ。霊幻さんとヨリを戻せないと知って時間そのものを巻き戻そうとしてる」
「まさかの！元カレ連合による痴話喧嘩の末の！！世界の終
焉！！！！」
鈴木統一郎は頭を押さえる。
「霊幻新隆は世界平和のために死んだ方がいい」
「気持ちは分かるが、色々あンだよ。芹沢がガードをして、霊幻新隆を影山茂夫の説得に向かわせる。バリア強度は芹沢がトップクラスだ。鈴木はそのサポートを頼む」
「……バリアは小さいほど硬く、長持ちさせられる。私がついて行かない方がいい。その代わりに、渡せるだけ力を譲渡しておこう」

芹沢の身体に燃えるような力が流れ込む。
「頼んだぞ、芹沢」
「はい、社長……！」
「霊幻さん、僕たちからも、力を渡しておきます。……愛する貴方を守れるように」
花沢が進み出て、羽根の形のペンダントトップに力をこめる。鈴木将がペンダントにくくりつけられたストラップに、エクボがペンダントに下げられた指輪に力をこめ、ヨシフがペンダントに結ばれていたブレスレットのスモーキークォーツに煙草の煙を吹き込む。最上啓示が芹沢のポケットに入っていた骨に霊力をさらに渡す。
そして律が、霊幻のスーツの胸元に刺さっていたボールペンに突破の力をこめた。
「霊幻さん──僕たち元カレは、あなたを愛している。それだけは本当なんだ。あなたを元カレという立場から守るために、手を組んだ。それが本来の元カレ連合の在り方だ。兄さんのやり方は元カレとして間違っている！すみませんが、霊幻さんに止めて欲しい……！」
「えっごめんさっぱり分かんない元カレ連合って何？律くん何言ってんの？？」
「霊幻さん、行きましょう！そんなに時間は無い！」
霊幻と芹沢は、竜巻を巻き起こしている真っ黒な球体に向かって歩き出す。
『邪魔しないでください』
茂夫の思念波が辺りに響いた。
『師匠、これはあなたの幸せのためでもあるんですよ？──戻りましょう、あの、幸せだった、今カレの時代へ』
「馬鹿、モブ、忘れたのか！？俺と、お前は……ッ！」
『……』
「ダメだ、聞いちゃいやしない。あの黒いバリアを破るしかないか……」
「おそらく、律くんのボールペンで貫通できます。力の質で弟の物だと分かると思うんで」
芹沢の言葉に頷いて、霊幻は暴風の中を進む。

「相変わらず凄い力だ……！」
何度も圧倒的な超能力で溶かされるバリアを、その度に芹沢は張り直す。
「霊幻さん、俺の傘のできるだけ内側に入って！」
「っ芹沢！」
巨大なコンクリートの破片が２人に襲いかかってきていた。
（頼むぞ……！）
芹沢は最上啓示の骨を噛み砕く。
ド、と一気に莫大な霊力が流れ込み、芹沢はパニックになった。
「アァ゛ア゛ア゛ァ゛ア゛！！！！」
「芹沢ッ！」
コンクリート片は消し飛んだが、芹沢は暴走しそうになってしまう。
（優先順位！優先順位！俺が守りたいもの！トリアージ！……何かを犠牲にしてでも……！）
ドス、と芹沢は、支給されていたアーミーナイフで足の甲を刺す。
過剰な霊力は傷口から抜け、芹沢の状態は安定した。
「芹沢……ッ！」
「大丈夫です、思ったより最上さんの霊力が多くて……なんとか安定させられました」
不思議と痛くは無かった。緊張しているせいだろう。踏み出すたびに血をこぼしながらも、芹沢は進んでいく。
霊幻と２人、歩むために。
中心地に近づくほど、風は激しさを増す。
芹沢は統一郎の力も最上の力も使い切り、自分のバリアの限界が近づいてきていることを、バリアのヒビで理解した。
「霊幻さん、これ以上近づくと、俺のバリアは持ちません」
冷静に判断して芹沢は状況を口にする。
「ですが、貴方が身に付けているお守りは、貴方を守る事だけに特化した呪いだ──おそらく、影山くんに辿り着くまで、もってくれるでしょう」
霊幻は頷く。
「行ってくる」

「いってらっしゃい……！」
霊幻は芹沢の信頼を背に、一歩、傘から踏み出した。
１歩、２歩。エクボの指輪が錆びて、崩れ落ちた。
３歩、４歩。将のストラップが風化して、風に溶けていった。
５歩、６歩。霊幻に襲いかかったガラス片から守るように煙が吹き出し、ヨシフのブレスレットは弾けて消えていった。
７歩、８歩。光の鞭が霊幻の周囲を一瞬薙ぎ払い、花沢のネックレスは千切れてバラバラになった。
「モブ──！」
黒い球体の前に立ち、霊幻は律のボールペンを突き立てる。ボールペンは茂夫の力に耐えきれず、粉々に折れてしまった。
『……律？』
（（届いた！））
大事な弟の力を感じ、茂夫が一旦バリアを解除した。
「モブ！聞け、俺たちはやり直しても別れる！絶対だ！」
「し、しょう」
すかさず茂夫の顔を両手で挟んで、霊幻が説得を始める。
「忘れたのか？俺と付き合って、お前はずっと元カレの存在にイライラして、怒ってた」
「それは、そうですけど、」
「俺たちは口論が絶えなかった。俺がいっぱい元カレがいる時点で、お前は俺を許せなかったんだよ」
「それは……それは……」
「時間を戻してお前の浮気騒動を回避したところで、何か別の理由で、俺たちは必ず別れる。……芹沢と付き合って、よく分かったんだよ。俺が我慢して謝って、それでなんとか続けられる関係なんて、元々無理があったんだ、って。モブ、残酷だがな、」
わなわなと震える茂夫を、じっと霊幻は見つめる。
「次は俺がお前を捨てる」
ふ、と風が止まった。
「師匠……でも僕、僕は……」
「そして何度でも、きっと俺は、芹沢を好きになる」
がく、と茂夫の膝が折れて、自衛官たちが投網を投げる。

「まだ好きなんです……師匠が好きなんだ……僕は、どうしたらいいんですか……！」
はぁ、と小さく霊幻はため息をついて。
「苦しめ」
そっと弟子に呟いた。
「は、はは──そっか、そうですね」
「うん」
「師匠は優しいなあ。そっか……」
自衛官に拘束され、連れて行かれながら茂夫は壮絶な微笑みを霊幻に向ける。
「僕は師匠を好きなままでいいんですね？師匠はそれを、許してくれるんだ」
霊幻は苦笑した。
「それこそ、お前の好きにしたらいい。俺以外に迷惑かけないようにな」
茂夫はヨシフ先導の元、自衛隊の装甲車に乗せられて行った。

※

「あ゛ーっ始末書が終わらねーッ！！！！」
ヨシフが灰皿を満杯にしながら書類相手に叫ぶ。
「凄いな、防衛省、国交省、環境省、警察庁からそれぞれ３００枚近く書類出せって来てる……」
「農水省、ついでに国宝動かしたから宮内庁からもだ。超能力者が何かする度に見張りの俺に反省文書かせるのマッッジで止めてくれよ！！！！」
ヨシフさん可哀想、と芹沢の頬が引き攣る。
「しかしコレ本当に大変ですね……何百回『大変申し訳ありませんでした』って書けばいいんだろう……」
「他人事みたいに言ってるがなあ！？お前この間屋根の上飛んだだろ！！あの時も俺ぁおんなじような事してんだからな！！！！黙って手ぇ動かせ！！！！……あっはいヨシフです。……はい、はい、大変申し訳ございません、私がついておりながら……このような事

は二度と……はい……」
「す、すみません……」
やってみて初めて裏方の苦労が分かる。黙々と鈴木統一郎が書類を手伝う理由も。芹沢は他の超能力者たちと一緒に、ひたすらヨシフの負担を減らした。

と、静岡基地が揺れた。

「なんだ！？」
「収容していた影山茂夫が壁を吹っ飛ばしました！！」
「ええいまた始末書増やしやがって……！芹沢、鈴木、来い！残りは書類やっててくれ！」
急いで研究棟に向かうと、龍のような目をして怒った影山茂夫が、ゆったりと芹沢たちを睨み付けた。
「──元カレ連合のメンバーが師匠にしたこと、今、エクボに聞いたんだけど」
ヨシフは頭を抱える。１番知られてはいけない人に知られてしまった。
「何で僕に教えてくれなかったんですか？僕ってそんなに頼りないですか？──それとも、怒り狂って暴れるとでも思ったんですか？」
「実際壁壊してるだろうが説得力が無え！それで頭下げるの俺なの分かってるか！？！？」
「あっすみません」
ヨシフが新しく煙草を咥えたのに、さっと発火能力者が火をつける。
「ありがとな。でもそう言うの要らないから」
超能力者は全員ヨシフに頭が上がらなさ過ぎて、とにかく何か媚びたい気分だった。
「僕は元カレ連合に、仲間意識のようなものを感じていました。でも、師匠を傷つけたのなら──許せない」
茂夫は基地から飛び上がり、手を調味市の方にかざす。
「うん……僕が持ってる名簿通りなら、これで全員のはず」
沢山の何かを調味市から取り寄せながら、茂夫はヨシフに笑いかけ

る。
「ヨシフさん、９０人の元カレ集めたんですけど、どうしたらいいですか？」
ヨシフは苦笑する。
「丁度俺も集めようと思ってたところだ。基地のグラウンドに降ろしてくれ。……そう、事情を知ってる、銃を持った怖いお兄さんたちが取り囲んでる所だ」
ふ、と茂夫は空を見上げて笑う。
「あなたに幸せになってとは言えませんが、」
グラウンドに降ろされた元カレたちが暴れるのをヨシフたちが取り押さえている。
「あなたの幸せを望んではいるんです」
茂夫はグラウンドにとん、と降りて、その姿だけで元カレたちを黙らせた。

※

ハワイの教会で、家族だけを呼んで、２人は式を挙げた。
「はーホント、お前戸籍にバツ付けちゃってさ……」
「お互い様でしょう。それにまだバツ付いてないです」
ホテルで２人で星空を眺める。酒に弱い２人は、ココナッツジュースを吸いながら、ずっと話し込んでいた。
「明日どこ行きます？米軍に特別に許可もらってるんで、どこでも超能力でひとっ飛びですよ」
「お前、行きたいところ無いのかよ」
「俺、霊幻さんが行きたいところに連れて行きたいんですよ」
「なんだそれ」
「贅沢だと思いません？霊幻さんの願いを叶えていい、だなんて」
「ホント、なんだよ、それ……」
霊幻は星空を見て顔を赤く染める。
そして躊躇いがちに、口を開いた。
「あの、な……本当はこう言う事、言っちゃいけないと、思うんだけど……」

「なんです？」
「俺、超能力で、海底に行ってみたいんだ。……お前ら能力で悩んでるのに、こんなこと、言っちゃいけないんだろうけど」
「それとこれとは話が別ですよ！行きましょう！今から！」
「今から！？」
芹沢は卓上のLEDカンテラを掴んだ霊幻を連れてベランダから飛び立ち、真っ直ぐ海に入る。
「もうすぐ海底です」
「すごいな、マリンスノーだ」
宇宙にふる雪のような光景の中、２人は手を繋ぐ。
「２人きりだ」
「そうですね」
「ほっとする」
「……俺もです」
ここまでは、元カレもやって来れないだろう。
芹沢はとうとう、元カレを振り切った。
「霊幻さん、また、たまに海底来ましょう」
「約束だからな」
２人はカンテラをかざして、懐かしいゲームやアニメの話をしながら、さくさくと海底を歩いていった。

この話は──
１０１人の男に愛された霊幻と、それを受け止めることができた芹沢が、ただお互いの手を取って、幸せに生きていくお話でした。

完